

〔論文〕

# 保育者の表現力の変容が及ぼす 子どもの音楽的表現力への影響

—リトミックを通しての考察—

中 根 佳 江\*

ここ数年、保育者から表現をしない子どもへの指導について、良く質問を受けるようになった。そこで筆者が各園でリトミック指導時に保育者の子どもへの関わり方に注目したところ、保育者の音楽的表現力の差がある事に気づいた。

子どもを取り巻く環境として、家庭では保護者が忙しく、子どもとゆっくり歌を歌うという時間もない。そして保育現場では、様々な取り組みに追われ、子どもと楽しく音楽的活動を行う気持ちの余裕が減少しているように見受けられる。

そのような環境の中で、保育者の音楽的表現力の差が子どもの音楽的表現力の向上に関連されると推測し、本研究では、調査①では、保育者への研修を行い、リトミックの理解と音楽的表現力の向上についての調査を行う。調査②では、保育者の被験児への音楽的表現力についての観察記録により、子どもの音楽的表現力についての調査を行う。

以上の調査より、保育者自身が表現することを楽しいと感じ、保育者が表現力を高め、表現に関する視野を広げて子どもに関われば、子どもの音楽的表現力の向上に影響を及ぼすことがいえる。

## I. はじめに

### 1-1 研究の背景

筆者は保育者に対してリトミック・歌唱指導・楽器遊びなどの音楽的表現力に関する研修を行っているが、その際、ここ数年、表現をしない子どもへの指導についてよく質問されるようになってきた。

そこで筆者は各園でのリトミック指導時に保育者の子どもへの関わり方に注目したところ、子どもと一緒にリトミック活動をしている保育者に音楽的表現力の差があることに気づいた。保育者としての経験の長短や音楽が得意・不得意といった要因だけではなく保育者の子どもに対する表情、言葉がけ、態度や、保育者自身の表現力にかなりの違いが認められたのである。

リトミックという音楽的な活動が苦手で、音楽的表現力が低い保育者もいる。そのような保育者は、リトミック活動時は苦手意識から音楽的表現力が低いが、リトミック活動以外の保育時間は表情も豊かに子どもと接している保育者と、リトミック活動時とリトミック活動以外の保育時間も変わらず、全体的に保育者自身の表現力の低い保育者がいることが分かった。

---

\*花園大学 非常勤講師

子どもの音楽的表現力を考える際、子ども自身の持てる力も考えなければならないが、子どもを取り巻く環境も重要なポイントである。例えば、家庭では、保護者の生活スタイルの差により、子どもとゆっくり関われない保護者もあり、子どもが表現をしても、それを受け入れることができず、子どもの表現力も育たなくなっている。また保護者自身の表現力も低くなっているように思われる。昔は、子どもと保護者が一緒に歌いながら生活をしている様子をよく見かけたが、近ごろでは子どもと一緒に歌を歌うという時間も少なく、子どもに子守歌を歌った経験もない保護者も少なくない。

家庭がそのような現状にある中、保育現場の音楽的環境は大変重要なものであるといえる。にもかかわらず保育現場では様々な取り組みに追われ、保育者自身に心の余裕がなく、子どもと楽しく音楽的活動を行う気持ちが減少しているように見受けられる。

また保育現場では、保育者自身の問題だけではなく、CD・DVDなどの音源の進化により、保育者が自ら子どもに向かって表現するのではなく、音楽媒体を通して子どもたちに表現させることが増えてきている。そのことも保育者の表現力の低下に影響しているのではなかろうか。

そのような環境の中で、保育者の音楽的表現力の差が子どもの音楽的表現力に関連すると推測される。

## I-2. 研究の目的

研究の背景で述べたとおり、子どもの音楽的表現力に関連する環境の中でも特に重要な保育者の音楽的表現力の変化により、子どもの音楽的表現力がどのように変化するかを調査するのが、本研究の目的である。

すなわち、本研究では、保育者自身が表現することを楽しいと感じ、子どもと一緒に表現できるようにリトミック研修を行い、その研修で保育者が表現力を高め、表現に関する視野を広げて子どもに関わることで、子どもの音楽的表現力はどのように変わるかを観察する。そして、保育者の表現力の成長がどのように子どもの音楽的表現力に影響を及ぼすかを研究することを目的とする。

## II. 音楽的表現力と乳幼児期の発達

本研究では、保育者の表現力の変容が子どもの表現力の向上にどのような影響を及ぼすかという目的を、リトミック (Rythmique) を通して考察するが、そこで、まずリトミック教育と乳幼児期の発達について論じる。

### II-1. リトミック教育について

リトミック教育という教育方法について論じるに当たって参考文献として、エリザベス・バンドゥレスパーの『ダルクローズのリトミック』<sup>1)</sup>、フランク・マルタン、チボル・デヌス、アルフレット・ベルヒトルド、アンリ・ガニユバン、ベルナール・レイシエル、クレル＝リズ・デュトワ＝カルリエ、エドモン・スタドレらによる『作曲家・リトミック創設者エミール・ジャック＝ダルクローズ』<sup>2)</sup>、エミール・ジャック＝ダルクローズの『リズムと音楽と教育』<sup>3)</sup>を主に使用した。

リトミック教育は、エミール・ジャック・ダルクローズ (Dalcroze, E.J., 1865-1950) によって創設された教育法である。ダルクローズは作曲家並びに音楽教育家として活躍した人物であるが、1893年ジュネーブ・コンセルヴァトワールのソルフェージュ教授の時、生徒の多くがハーモニーを単に数学的に分析し、音楽を知的に理解しているのみで、感覚を通して感動を起こすという音楽の真の姿を理解できていないことに気がついた。そこからダルクローズは、人が音楽を感知し、理解し、経験する時には二つの体の動きがあることを発見した。それは、耳が音楽を受け止め、すべての神経系統がリズムを受け止めるという動きである。ダルクローズは、人は筋肉でとらえたリズムと刺激を伝える神経をより鋭敏に発達させることにより、耳で受け止めた音楽を身体で再現することができ、音楽の感動を、全身の筋肉と神経によって具体化できると考えた。また、個人の経験を大切に、歩く・揺れる・まわる・ひねるなどの生活の中で経験する動きを通して、音楽を理解させようと考えた。音とリズムを知覚し、そのような知覚作用を調整することができるのは耳であり、「音の意識」は繰り返し行われる耳と声の経験から形成される。私たちがリズムを表現したり、知覚したりできるのは身体全体の動きによってであるが、さまざまな動きの経験は筋肉運動感覚として体に蓄えられ、この筋肉運動感覚をダルクローズは「第6番目の感覚」と呼んだのである。第6番目の感覚は、体の運動のさまざまな度合いの活力と速さを、その運動の引き起こす感情との関係において調和させ、人間の身体組織の全体に感情を浄化する能力を付与する。ダルクローズはまだ分析されることなく探求されていない感覚を「筋肉のリズム感」と言った<sup>4)</sup>。

私たちは普通頭脳だけで考えているが、ダルクローズは身体をリズムの躍動する楽器と化し、時間の減少を空間の減少へと移し変える変圧器とするような機能を持っていると考えた。リズム感覚を生むため教育が動員しなければならないのは体全体ということになる。筋肉は動くために作られたもので、リズムは動きなのである。動きの型と言うのは、筋肉、空間の大きさ、時間の長さが組み合わさった結果なのである。これがリトミックに形成されるものの核心としてダルクローズは具体的には次のように言っている<sup>5)</sup>。

「リズム意識」とは物理的運動と精神的運動との関係を捉える能力であり、さらに感情や思考の刺激をそうした運動へと伝える変化を感じる能力である。「リズム表現」に満たされ、体のすべての筋肉でそれをイメージへと反映しなければならない。そして「リズム意識」とは筋肉の収縮と弛緩を、あらゆる度合いのエネルギーと速度で繰り返し経験することにより、形成される。

結局リズムの感情を作り出すための運動において、教育が施さなければならないのは身体全体であるとダルクローズは述べている。リトミック教育は次の三つの主要な目的を指している。

1. 音楽的感覚を完全に身体組織に発達させること
2. 運動の本能をすべて呼び起こした後に、秩序と均衡の感覚を創造すること
3. 想像力を発達させること

そしてダルクローズは最終的に、リトミック教育の目的は、学習を終えたときに「私は知っている」ではなく「私は感じとる」ということだと述べている<sup>6)</sup>。

また子どもの体は極めて自然で、リズムの本能的な部分、すなわち拍子を持っている。それは次の三つである。

1. 心臓の鼓動は、その規則性により、拍子について鮮明な観念を与えてくれる。
2. 呼吸作用は時間を規則正しく分割し、拍子のモデルに与えてくれる。
3. 規則正しい歩行は拍子及び時間の均等分割についての完璧なモデルとなる。

そして規則正しい歩行の中に、子どもに対するリズムへの手引きの自然な出発点を見出すのである。

このようなダルクローズが創設したリトミックは、乳幼児期の子どもにとって「動き」から「学ぶ」、「動き」から「感じる」そして「表現する」という適切な教育方法といえる。

以上のことからリトミックは本研究の調査方法の手法として捉え、調査①保育者の研修、調査、②保育者による園児の音楽的表現力の観察に使用する。

## Ⅱ－２．乳幼児期の発達について

本研究の対象である乳幼児期は発達が著しい時期である。その身体的発達、音楽的発達を踏まえて調査しないと子どもの表現力への影響は考察することができない。またその発達に伴う表現の特徴も踏まえて調査しなければならない。

乳児期の身体的発達と音楽的発達を合わせて下記の表に整理した。(表1)<sup>7) 8) 9) 10) 11)</sup>

表1 0～5歳児の各発達と表現の特徴

	身体的発達	音楽的発達	表現の特徴
0歳	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 大変発達の著しい時期</li> <li>・ 生後1か月は周りの環境に反応し、反射でしかなかったものが能動的、適応的な物へと変化する</li> <li>・ 3か月ごろ音のする方向を見るようになり、4か月であやすと笑いかえすようになる</li> <li>・ 6か月ごろから喃語を発し、その後一人座りができるようになり、四つ這い・つかまり立ち・伝い歩きなどができるようになる</li> <li>・ 12か月までに初語も出るようになる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 聴力は誕生時にはまだ十分発達していないが、生後3ヶ月ぐらいで二つの2オクターブくらい離れた音を認識できるようになる</li> <li>・ 6か月ぐらいで音楽と同期した身体全体の動きではなく、むしろ一般的な反応を見せる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 周りの音や声やそれが作り出すリズムを丸ごと感じ、自ら声や動きで表現する能力を持っている</li> <li>4～5か月</li> <li>・ 保護者の歌い掛けや、リズムミカルな語りかけに対して手足を動かしたり、声を出したりして笑いながら反応する</li> <li>6か月以降</li> <li>・ 座れるようになると、両手を手合せしたり、簡単な手遊び歌を楽しんだりするようになる</li> <li>9か月以降</li> <li>・ 周囲を観察し、積極的に模倣するようになる</li> </ul>



	身体的発達	音楽的発達	表現の特徴
1 歳	<ul style="list-style-type: none"> <li>・歩行が確立する</li> <li>・「自分でやるという気持ち」が芽生える</li> <li>・1歳6か月ごろ転ばず歩き、なぐり描きや絵本を指さす</li> <li>・体を使わず頭で考えイメージを浮かべる事を少しずつできるようになる</li> <li>・意味のある単語を話すようになる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・0～1歳 音に対する反応する 声の響きの研究</li> <li>・1～2歳 自発的に音楽を作る 声を色々発し、その中にはメロディを伴うものやリズムを感じさせるパターンなどが表れる 短い自発的な歌を自由に歌う。それはしばしばメロディを感じさせ柔軟性にある臨機応変なリズムパターンを伴う</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・動作や声を同期させるような表現が見られるようになる</li> <li>・大人とのかかわりの中でため込んできたリズムを自らの内発的欲求から声や体の動きで表現するようになる</li> <li>・生活の中のいろいろな場面で自然にリズムを感じ取り声と体の動きを同期させることを学んでいく</li> </ul>
2 歳	<ul style="list-style-type: none"> <li>・走る、ボールをけることができるようになる</li> <li>・指先の巧緻性も高まる</li> <li>・おしゃべりが盛んになり、2語文章を話すようになる</li> <li>・自我の発達とともに自己主張が表れる</li> <li>・ごっこ遊びが見られるようになる</li> <li>・想像の世界の中で遊び始める時期</li> <li>・遊びの場面では一人遊びや傍観遊びが中心</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・10%の子どもが拍に合わせて少しの間身体を合わせるようになる。しかしこれは偶然のできごとである</li> <li>2～3歳</li> <li>・聞いた歌のフレーズを再生するようになる</li> <li>・自発的に歌う中で学んだメロディのパターンを用いる。歌の一部分を歌う事ができるようになってくる</li> <li>・歌全体を正しく歌うことは出来ないが、歌の模倣をするようになる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・感情を直接的に身体全体で表現することが多く、飛び跳ねたり、ギャロップをしたりする事もある</li> <li>・身体全体を使った動きは音楽を聞いたときに特に顕著に表れる</li> <li>・手遊び歌などを好み、歌いながら動くことを楽しむ</li> <li>・歌と動きが一致しないが、徐々に関連を深め、指、手、腕の動きなどは歩く、走るなどの移動運動よりも前に歌と同期する</li> </ul>
3 歳	<ul style="list-style-type: none"> <li>・階段など足を交互に使って登れたり、三輪車をこぐことが出来たりするようになる</li> <li>・少しの段差を飛び下りることができるようになる</li> <li>・名前などの質問に答えることができる</li> <li>・介助なしで食事や排せつができるようになる</li> <li>・「大きい、小さい」「長い、短い」などの関係を理解できるようになる</li> <li>・保護者以外の外界への興味が高まり、友達と遊ぶ喜びを覚え、新しい世界を探索し始める</li> <li>・他者理解の発達が進み、やさしい気持ちも芽生える</li> <li>・遊びの場面では並行あそびが中心</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・リズムの同期ができるようになる</li> <li>3～4歳</li> <li>・リズムを記憶する 旋律の一般的なプラン（構想）を考える</li> <li>・自然発生的な種々の動きが減って、その代わりに知っている動きを実践したり、探求したりする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活の中で思いついた言葉をリズムに唱えながら歩いたり、体の一部を叩いたりしながら歌う姿がある</li> <li>・拍に合わせてたり、調整された表現が見られたり、筋肉のコントロールが可能になる</li> </ul>

	身体的発達	音楽的発達	表現の特徴
4 歳	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 身体の発達により運動の能力も増し、全身を使って遊ぶようになる</li> <li>・ 身近な人に少しずつ共感できるようになる</li> <li>・ 思い通りに行かない場面では、葛藤を経験する</li> <li>・ 友達や身近な人の気持ちに共感できない場合と葛藤を経験しながら、友達や身近な人の気持ちに共感できるようになってくる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 歌全体を一続きに歌う事ができるようになる</li> </ul> <p>4～6 歳</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 音広域を分別できる</li> <li>・ 単純なリズムを聞いて打つことができる</li> <li>・ 音の強さや穏やかさを理解する</li> <li>・ 優しい音やリズムのパターンで“異なる”と“同じ”が弁別できる</li> <li>・ 拍子に動きを合わせることができるようになる</li> <li>・ 規則正しい拍子を作り始め、楽器の形状などに触発されてグリッサンドや音階や音程のパターン、トリルやトレモノなどの技法を使用し始める</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 身体の動きの種類も増え、複数の異なる種類の活動などスキップなどができるようになる</li> </ul>
5 歳	<p>基本的生活習慣が確立する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 友達との遊びの場面では、ルールのあるあそびを楽しみ、共同遊びも見られる</li> </ul>	<p>5～6 歳</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 音の強さや穏やかさを理解する</li> <li>・ やさしい音やリズムのパターンで異なると同じが弁別できる</li> <li>・ リズムの記憶は、6 歳までの間に著しく同期できるようになる</li> <li>・ “キー”の感覚が安定し、正確に学べばほとんどのうたをうたう事ができるようになる</li> </ul>	<p>身体のバランスをとる感覚が成熟してくるので、安定した動きで反応できるようになる</p>

以上のような各成長の特徴を見ると、0～2 歳に関しては、音への反応から模倣が特徴とされ、3～5 歳は少しずつ一つのリズムを聞いて理解し、そのリズムを表現できるように同期し、その後リズムパターン（複数のリズムを連結する）を聞き分けるようになり、叩けるようになり、数の理解も出てくるようになることが分かる。

したがって本調査における観察の観点を、0～2 歳は即時反応・模倣活動、3～5 歳はリズム感・拍子感に絞り、調査②の保育者による被験児の年齢の観察の観点に沿って観察記録を取ることにする。

### Ⅱ－3 乳幼児期の音楽的表現力に関する先行研究

梅本堯夫（1999）は幼児期の子どもの生活や成長にとって音楽が必要不可欠なものであることを論じている。梅本が「何よりも音楽は子どもにとって遊びの一種である」<sup>12)</sup>と

述べているように、子どもは遊びの中で環境を通して音楽的表現を行う。

その中で小池（2009）は、保育者の身体表現が音楽の内容を介し、幼児の身体的な表現に影響を与えられるのではないかと述べている。保育者は、幼児の表現のモデルでもあるので、身体的な音楽表現の豊かな保育者が、幼児の前で創造的な表現を見せるなら、幼児はその表現に影響されてより一層創造的で豊かな表現をするようになるであろう<sup>13)</sup>とも言っている。

また伊藤（2009）も様々な形で表れる幼児のひたむきな“表現の芽”に柔軟に対応できる音楽性、そして何よりも保育者自身の豊かな感性が不可欠であることについて論じている<sup>14)</sup>。同じく伊藤（2011）は、幼児の音楽行動は日々の生活や遊びを通じた総合表現であり、それゆえに、保育者は「音楽と動き」の関係性という視点を持って、幼児の音楽表現を捉える必要があるとする。保育者は、音楽の美しさや楽しさを心で感受し、自分の持てる最大限の力で表現することの喜びを幼児に伝えたり共感したり、さらにはそれを発展させていく使命を担っていると言っている<sup>15)</sup>。以上の理由から伊藤（2012）は、保育者自身はこれらの音楽的概念を十分理解した上で、基礎的な技術や能力を用いながら幼児の発達段階に相応しい指導計画を立て、これを実践し、ひいてはその活動が幼児の音楽を愛する心、気持ちを引き出し伸長させていくことが、保育者に必要とされる音楽表現力ではないかと主張している<sup>16)</sup>。

近年の若者の心身の不調和として、突然キレる、引きこもるなどの行動が指摘されているが、このような問題の根底に乳幼児期に主体的な行動を取ったり、自分の想いを表現したりすることが十分に行われなかった、もしくはそれらが受容されなかったことが深く関連していると指摘されている<sup>17)</sup>。永井（2011）によれば、幼児が主体的に表現し自分自身の想いを込めた表現を他者に受容される体験は、表現技能や意欲を育むだけでなく、健やかな心身を発達させる非常に重要な活動である。幼児期に求められる表現活動の援助指導の目標は、発表会に向けて作品を完成させることや上手に発表できることにではなく、子どもたちがその後の人生の中でより豊かに自分自身を表現できる力を育てることにあるのである<sup>18)</sup>。

保育者の音楽的表現力が幼児の表現力に影響を与えることは色々な観点から述べられているし、乳幼児期の表現力の育ちがその後の人生にも影響を及ぼすのであるが、それにもかかわらず、保育現場の保育者の音楽的表現力と子どもの音楽的表現力との関連や乳児期から幼児期までの音楽的表現力の発達に関する研究がほとんどない。よって本研究では、乳幼児期という幅広い年代の子どもの音楽的表現力に注目し、保育者の音楽的表現力と子どもの音楽的表現力の関連について研究することにしたい。

### Ⅲ. 実証的研究 1

#### 調査① 保育者のリトミクの理解と音楽的表現力に関する調査

（1）調査対象：大阪府内A保育園

全保育者 18 名（主任 1 名・各クラス担当 17 名）

（2）調査期間：2013 年 4 月より 2013 年 10 月

表2 保育者の担当児年齢ごとの人数

担当児年齢	保育者数
0歳児	3名
1歳児	4名
2歳児	4名
3歳児	2名
4歳児	2名
5歳児	2名

### (3) 調査方法

A保育園では、保育者は、月1～2回子どもと一緒に、筆者の指導の下でリトミック活動を行っているが、リトミックについての研修を行っていないので、そのねらいなどを理解していないことが多いと思われる。そこで予備調査として2012年12月から2013年2月まで月1回、筆者による講義、実習を交えながら保育者自身がリトミックを楽しみ、理解し、保育者としてのスキルの幅を広げる体験をし、その後ふりかえりを記入して自己評価をする機会を設けた。

その結果、保育者がリトミックの活動を楽しみ、リトミックの目的や各項目のねらいを理解したことがふりかえりより読み取ることができた。それをふまえて、本調査では、保育者自身が子どものリトミック活動時に使用している内容の即時反応・模倣活動・リズム・拍子・フレーズ・音の6項目について実践的な研修を受けることによってその活動のねらい・どのように展開をしていくかについて、理解を深め、研修後に自己評価を4段階方式（4. 保育時実施できる 3. 研修時仲間と一緒にならできる 2. 研修時戸惑う事もある 1. わからない・できない）で実施してもらった。具体的には、2013年4月から2013

年9月まで月1回、筆者が全保育者に対して研修を行い、その後保育者が自己の研修を振り返りながら自己評価を行った。表3は研修で行った活動の具体的な内容である。縦軸は開催月、横軸は研修の活動の項目である。

本研究を行うに当たり、保育園に口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答を持って同意を得たこととした。

表3 研修で行った活動の内容

	即時反応	模倣活動	リズム	拍子	フレーズ	音
2012年12月	音の合図で、止まる・座るなど	音楽に合わせて、動物のイメージをしながら自由に動く	2拍の基礎リズムを叩く ♪♪ ♪♪ ♪♪ ♪♪ ♪♪ ♪ ♪♪ ♪ ♪♪	1人・2人組で2、3、4拍子を手合せする。 拍子を言葉に当てはめて、手合せをする		



	即時反応	模倣活動	リズム	拍子	フレーズ	音
2013年 1月	合図で手合わせ	音楽に合わせて、動物の模倣活動（種類を増加）	*基礎リズム 1・2人で叩く 季節の言葉を当てはめる *補足リズム ♪豆まき	1人・2人組で2、3、4拍子を手合せやダンスをする。 拍子を言葉に当てはめて、手合せをする	♪どんぐりころころ フレーズの間歩き、フレーズの変わり目でどんぐりを渡す	音の高低 ・音の高低を手で表現 ・手をつないで音の高低を身体で表現
2013年 2月	合図に合わせて、表現する *おひなさま ホホホ、エッヘンなど	音楽に合わせて動物の模倣活動 指人形を箱から選び即興で動く	*基礎リズム 言葉のリズム *補足リズム ♪たのしいひなまつり *リズムステップ 曲のリズムに合わせて	2人組で2、3、4拍子を手合せやダンス、ボールをついて表現する。	♪うれしいひなまつり フレーズの変わり目で歩く向きを変える	音の高低 ・音の高低を手で表現 ・手をつないで音の高低を身体で表現
2013年 4月 本調査開始	*合図で手合わせ *合図で合図のポーズを入れながら手合せ	動物の模倣活動 指人形を箱から選び即興で動く	*基礎リズム 言葉のリズム *補足リズム ♪ぶんぶんぶん *リズムステップ *リズムステップと補足リズム	2人組で2、3、4拍子を手合せやダンス、ボールをついて表現する。	♪こいのぼり フレーズでこいのぼりを次の人に渡す  担当年代に合わせて、保育時でできる方法を考える	音の高低 ・音の高低を手で表現 ・手をつないで音の高低を身体で表現 音の階段 ド～ドの階名唱のうち1音を心唱する
2013年 5月	*合図で手合わせ *合図で合図のポーズを入れながら手合せ *合図の数を床につける	動物の模倣活動 他の保育者と同じ動きをしない	*基礎リズム 言葉のリズム *リズムパターン 2つのリズムを合わせる *補足リズム ♪あめふり 課題 補足リズムの入れ方を担当クラスで考える	2人組で2、3、4拍子を手合せやダンス、肩たたき、ボールをついて表現する。	♪アルプス一万尺 ダンスを通してフレーズを感じる	音の階名 ハンドサインをつける
2013年 6月	*合図で手合わせ *合図で合図のポーズを入れながら手合せ *合図の数を床につける	動物の模倣活動 他の保育者と同じ動きをしない	*基礎リズム 言葉のリズム *リズムパターン 2つのリズムを合わせる *補足リズム ♪カエルの合唱 ボールで補足リズムをつく	2人組で2、3、4拍子を手合せやダンス、肩たたき、ボールをついて表現する。	♪ガボット 円形に座り、フレーズの変わり目に物を渡す	音の階名 ・ハンドサインをつける ・数音心唱する 音の高低 体で表現

保育者の表現力の変容が及ぼす子どもの音楽的表現力への影響

	即時反応	模倣活動	リズム	拍子	フレーズ	音
2013年 7月	* 2人組フープを使って、音楽に合わせて歩き、合図で合図の動きをする	動物・海の生き物の模倣活動 ・他の保育者と同じ動きをしない	*基礎リズム 言葉のリズム *リズムパターン 4つのリズムを合わせる *複リズム 左右の手で違うリズムを叩く	2人組で2, 3, 4拍子を手合せやダンス、肩たたき表現する。	♪おほしさま [課題] 担当の年齢に合わせて、どのように保育で取り入れるか、考え実施	音の階名 ・ハンドサインをつけて1曲歌う ・数音心唱する
2013年 8月	♪あんたがたどこさ 「さ」でボールを渡したり、手を打ったりする	動物・海の生き物の模倣活動 ・他の保育者と同じ動きをしない	*基礎リズム 言葉のリズム *リズムパターン 4つのリズムを合わせる *複リズム 左右の手で違うリズムを叩く	2・3・4拍子 言葉のリズムをあわせる [課題] 次の研修までに2, 3, 4拍子の動きを考える	♪ぞうさんのおさんば 歌遊びからフレーズを感じる	音の階名 ・ハンドサインをつけて階名唱 ・合図で「ド」に戻る
2013年 9月	♪まわせまわせ ロープを回し、止まった色で音楽に合わせて動く	動物・海の生き物の模倣活動 ・他の保育者と同じ動きをしない	*基礎リズム 言葉のリズム *複リズム 左右の手で違うリズムを叩く *リズムアンサンブル 虫の鳴き声 [課題] 3リズムのアンサンブルを考えてくる	課題の発表 ♪楽しいポーレチケ 3拍子のダンス	♪おおまきばは緑 ダンスで拍子を感じる	音の階名 ・ハンドサイン ・数音心唱する
2013年10月	♪きのこのこの色で反応 フープを使って合図で動く	動物の模倣活動 ・他の保育者と同じ動きをしない	*基礎リズム *複リズム 2人組 違うリズムを打つ *リズムアンサンブル 課題を発表	2.3. 4拍子 2人組 手合せ ダンス ボール お手玉	♪ぞうさんのおさんば	*音の階名 ハンドサイン *和音

また最終研修終了後には、全保育者に総括的なアンケートを行った。アンケートの項目は、1. 研修は有意義だったか 2. 研修を受けて学んだこと気づいたこと 3. 研修を受けて自分の中で変化があったか 4. これから保育現場でどのように子どもたちと表現活動をしていきたいか、以上の内容であり、自由記述で行った。

#### (4) 結果

保育園は長時間保育のため、保育者はシフト性の仕事になっている。そのため園の定めた17時から19時という研修時間には保育者は全員そろわない現状であった。しかし、研

修日には欠席の保育者はいない状況で、できる限り積極的な受講体制が取られていた。

全保育者のふりかえりのまとめは、18人の自己評価に対するグラフ（図1. 2. 3）のような3つのようなパターンが見られた。またアンケートを分析した結果、保育者の気づきが見られた（表4）。具体的に言うと、4月から10月の間で向上している保育者が18人中3人（図1）で、あまり変化しなかった保育者は18人中12人（図2）だった。また下降した保育者は18人中2人（図3）いた。全体的な特徴として、0～2歳児担当の保育者の自己評価値はあまり向上せず、維持型か下降型になった。3～5歳児担当の保育者は多少上下しているが、全員少なからず向上していることが分かった。担当する子どもの年齢によって違いがあるが、全研修後のアンケートからは、各年齢担当の保育者もさまざまなことに気づいていることが分かった。自己評価値と比例している保育者もいれば、自己評価値は下降気味の保育者でも、音楽的表現について楽しいと思い、保育者としてどのように表現すれば、子どもたちに影響を与えることができるかなどに気づいた人もいたので、自己評価値だけでは保育者の変容を示されないことが分かった。

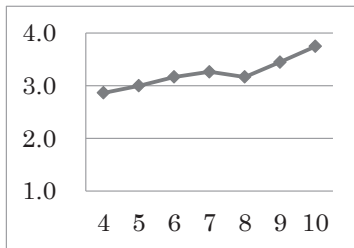


図1. 自己評価値が向上した保育者

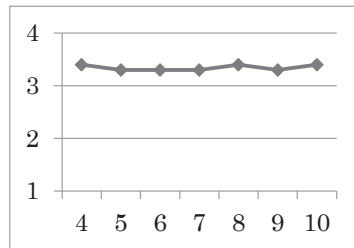


図2. 自己評価値があまり変化しなかった保育者

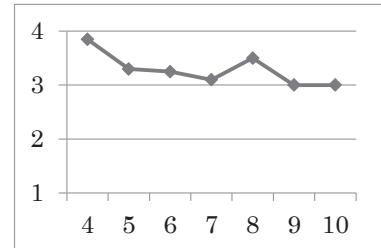


図3. 自己評価値が下降した保育者

表4 全研修後の保育者のアンケートの気づき

担当年齢	気づきのキーワード
0歳児	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育者も一緒に楽しんで活動することが今まで以上に必要</li> <li>・自分が楽しんでいなければ子どもたちも楽しめないだろう</li> <li>・普段の動きの中の声掛けにも取り入れて行きたい</li> </ul>
1歳児	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の思いつくまま表現すればよい（固定観念でなく）</li> <li>・小さいことからリズムを取り入れることでリズム感や表現力がだんだん身につく</li> <li>・何度も繰り返すことでリズムを体で覚えることができ、理解しようと考えることができた</li> <li>・色々な表現方法があると思った。それをじぶんでかंगाえるようになった</li> </ul>
2歳児	<ul style="list-style-type: none"> <li>・固定観念のようなものがなくなり、自由な発想になったと思う</li> <li>・今まであえて他の保育者と同じ動きをしていたが、違う動きを考えてすることで子どもたちが一つの音で違う動作ができるようになった</li> <li>・自分自身も楽しみながら子どもたちに歌や音楽の楽しさを伝えていきたい</li> <li>・表現活動やさまざまなことに興味が広がった</li> <li>・何回か研修を受けることで、表現をしやすくなり、楽しかった</li> <li>・保育者がさまざまな動きをすると、子どもたちもさまざまな動きをするようになった</li> <li>・遊びの中から感じるができる（音の高低・フレーズなど）</li> </ul>

担当年齢	気づきのキーワード
3 歳児	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 苦手だったのが、少し楽しめるようになった</li> <li>・ 遊びの中でいろいろ取り入れていきたい</li> <li>・ 少しずつ苦手だったことが分かるようになった</li> </ul>
4 歳児	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ いつもとは違った視点から表現を考えるようになった</li> <li>・ 保育者の中で表現するのは少し恥ずかしかったが、研修を重ねるうちにそのような気持ちもなくなりコミュニケーションを取るのにも、リトミックはよいことだと思った。</li> <li>・ 友だち同士の関わりを深める意味でもリトミックはよいことだと感じた</li> <li>・ 自由な発想でもいいのだと気づいた</li> <li>・ 自分が出来なかったこと（スキップ）ができるようになって嬉しい</li> </ul>
5 歳児	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 子どもは保育者の動きをしっかりと見ているんだと気づいた</li> <li>・ 自分なりにリトミックを楽しむことができるようになった</li> <li>・ 楽しんで行くことが一番大切だと思った</li> <li>・ 研修後、普段の保育にリトミックを取り入れやすくなった</li> <li>・ 子どもの目線になって考える事が増えた</li> </ul>
主 任	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 型にはまったことだけでなく、自由に表現できるように工夫していく</li> <li>・ 拍子を感じることができるになると、歌にメリハリがつくように感じたので、これからは是非取り入れたい</li> </ul>

#### (5) 考察

本調査のA保育園は、普段からゆっくり子どもと接している園である。そして、保育者自身の保育に対する姿勢が前向きである。A保育園の全保育者の自己評価値は図1・2・3であるが、グラフの数値を見ると、目立って上向する人は少なかった。

理由の1つとしては、研修内容を、毎回少しずつ難易度を上げていったことが考えられる。表現や音楽的技術が苦手な保育者は、初めの自己評価値が低いため、音楽的表現力を少しずつ理解したり、技術を習得したりして、自己評価値は向上しているが、ある程度表現や音楽的技術が得意な保育者は、初めはやさしい内容の研修において、自己評価値が高いため、研修を重ねて行っても自己評価値はあまり上向しなかったと言える。反対に内容の難易度が高くなるにつれ、少し難しさを覚え自己評価値が下がった保育者もいる。自己評価値では向上しているが、研修後のアンケートでは、あまり気づきがない保育者もいた。これは研修の成果としてではなく、保育者自身の性格なども自己評価値にも操作されると思われる。実技実習的にはできていると思っていても、実際保育者としての観点をしっかり持って、研修を受けているか受けていないかによっても自己評価値・アンケートの記述が変わってくるように思われる。

また0～2歳児担当の保育者の自己評価値の成長があまり見られなかった。これは研修内容をすぐに日々の保育現場で活用できない内容もあり、いつも接している子どもの姿と研修内容を結びつけにくかったのかもしれない。3～5歳児担当の保育者は研修内容をすぐ使用できることもあったので、0～2歳児担当の保育者と少し差ができたのであろうと推察できた。これは毎回研修後のふりかえりシートの自由記述で来年度以降年齢の高いクラスを担当した場合、活用したいという記述があったので、推察した。しかし0～2歳の子どもは保育者の模倣をすることが多いので、保育者自身の表現が変わることによって、子どもの表現が変わっていくことに気づいた保育者が多く、研修の自己評価値はあまり上



向していないが、保育者自身の気づきは表4のように多くあった。

予備調査から本調査まで約1年間で10回の研修によるリトミクの理解は、保育者にとって自分自身の音楽的表現を見直す機会となり、筆者と一緒に活動するリトミク時には、子どもたちと表現を楽しむ姿勢などにおいて向上したとみられた。よって調査①の目的である保育者のリトミクの理解と音楽的表現力を向上することに対して成果があったといえる。

#### IV. 実証的研究2

##### 調査② 被験児の音楽的表現力の成長についての調査

(1) 調査対象：大阪府内A保育園 園児

(歳児という表記は学年での表記とする)

各学年担当保育者 17 名

表5 調査②の対象者（観察保育者と被験児）

歳児 (学年)	保育者数	保育者1人が 担当する 被験児数	被験児総数	4月時 平均年齢
0	3	2～3	8	7か月
1	4	3	12	1.6歳
2	4	3	12	2.5歳
3	2	3～5	8	3.6歳
4	2	5	10	4.6歳
5	2	4～5	9	5.6歳

0歳は在園8名なので、0歳児を除き1歳時から5歳児は音楽的表現を積極的にするタイプの子どもと消極的なタイプの子どもを選んだ。

また男女比率は0歳児は男児5名・女児3名、1～2歳児は男児6名女児6名、3歳児は男児4名・女児4名、4歳児は男児6名女児4名、5歳児は男児4名女児5名となる。

(2) 調査期間：2013年4月より2013年10月

(3) 調査方法

筆者を含め、保育経験者など3名が検討した観察基準の項目（資料1）をもとに各保育者は被験児の音楽的表現力の様子を観察し記録を取る。

予備調査として2012年12月より2013年3月まで約月1回、保育者1名が2～5人の担当年齢の被験児を観察し、観察記録を取った。それにより子どもの成長をしっかりと観察するポイントの理解や細かな表現の成長に気づくようになったと述べている。よって本調査にも同じ観察ポイントをもとに同じ方法で観察記録を取り、被験児の音楽的表現力の成長を記録した。観察用紙は資料1に示したとおりである。観察値は4段階方式で、4.自分から積極的にする（他者に教えるぐらいできる）3.ともだち・先生と一緒にする（ひとりでもできる）2.友達・先生の関わりですることもある（友達・先生の関わりの中で

きることもある) 1. 全くしない(全くできない)と記録する。

本研究を行うにあたり、保育園に口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、また観察した保育者にも配慮事項を伝え、回答をもって同意を得たこととした。

各年代の音楽的表現力の観察の観点は次のとおりである。

0～2歳児＝音楽に対する身体的反応・イメージしたものを模倣する活動

3～5歳児＝音楽に対する身体的反応と基本的なリズムを理解し表現できるリズム感<sup>19)</sup>・2.3.4拍子を感じ、理解して表現する拍子感<sup>20)</sup>

#### (4) 結果

0～2歳児担当の保育者が観察を行った際、一番自由記述に多く書かれていたキーワードは、「気分によって表現が変わる」ということである。1日の間でもかなり変わるので、平均的に観察値をつけるように保育者に依頼をしていた。

また、観察が春から夏そして秋にまたがったので、暑さの疲れなどによって夏から秋にかけて体力的な影響も見受けられると観察用紙の自由記述に保育者から書かれていた。

被験児の観察値の変化は、順調に右肩上がりに上向した被験児(図4)もいれば、山型のように変化した被験児(図5)、山あり谷ありという変化する被験児(図6)もいた。

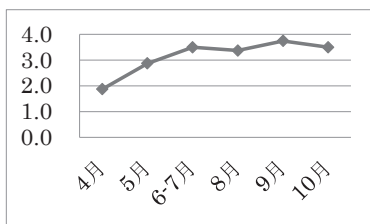


図4. 右型上がりに成長した被験児の観察

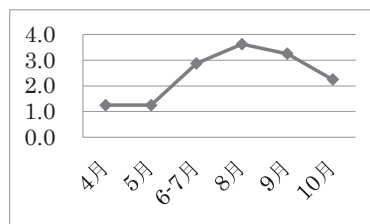


図5. 山型に変化した被験児の観察値

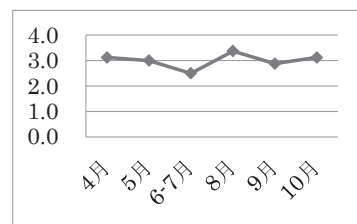


図6. 毎月上下する変化した被験児の観察値

4月の観察値と最終10月の観察値を比較すると、59人中44人の被験児は観察値が上向し、成長していたと言える(図7)。また、被験児には表現を積極的にする子どもと消極的な子どもの2タイプを選んだが、表現を積極的にする子どもは33人中24人(図8)、消極的な子どもは26人中20人(図9)の被験児も観察値は、成長している様子が見られた。観察値が上向しなかった15人の被験児のうち、12人は変化がなく、3人の被験児の観察値が下降した。(図10)観察値が下降した被験児の2人は表現が消極的なタイプの子どものであった。

#### (5) 考察

調査②は、保育者が表現の積極的にする子どもと消極的な子どもを各年代で表5のように選び筆者の設定した観察項目を4段階で、基準に照らし合わせて観察していく調査である。(資料1)

予備調査において、表現の消極的な子どもの表現の成長など、細かく気づくことができたことと、全保育者への観察の観点の理解への確認などを経て調査②を実施した。それに

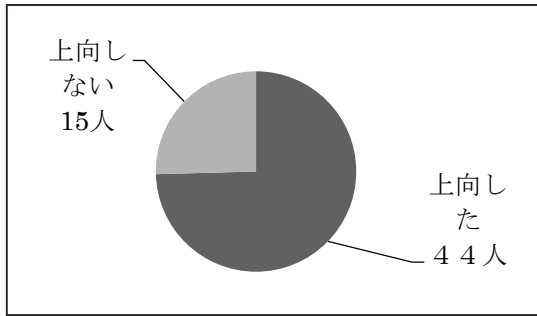


図7. 全被験児の観察値について

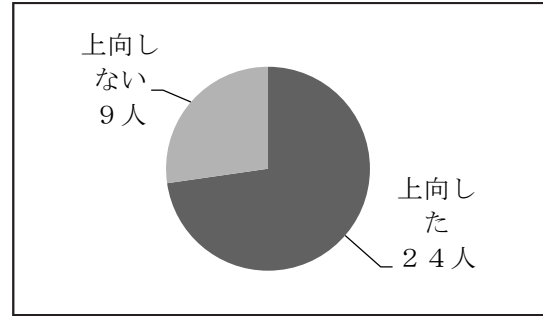


図8. 積極的に表現する被験児の観察値

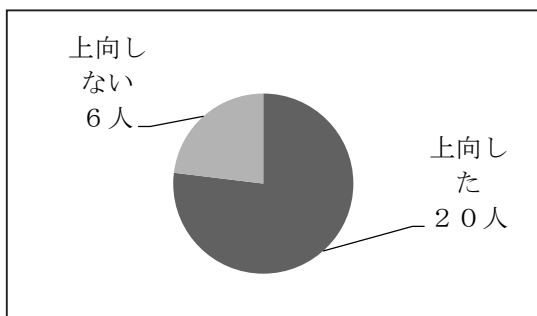


図9. 消極的なタイプの被験児の観察値

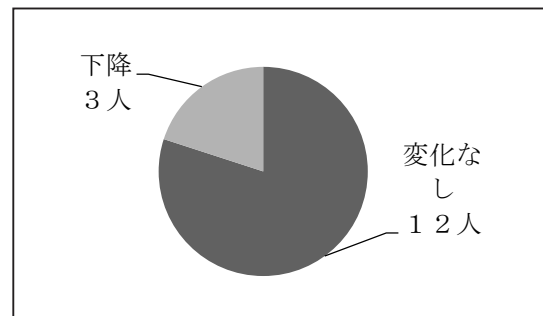


図10. 観察値が上向しなかった被験児

より、子どもの細かな表現の成長や音楽的表現力の成長を保育者が観察基準にそって観察することができた。また0～2歳児と3～5歳児の観察の観点は違ったが、4月からの担当クラスが変わっても、4月に再度全保育者への観察の観点の理解への確認を行ったことで、その年代に沿って観察して記録できた。保育者は細かな子どもの成長を気づくことができるようになったことで、観察値が上向している子どもが多くなったと思える。

しかしなかには観察値が下降した子どももいるが、0～2歳児においては気持ちのむらや体力的な低下に伴い、集中力や行動力が低下するのも要因の一つと考えられる。乳幼児は気持ちのむらや体力的な低下がかなり音楽的表現力に影響すると思われる。

0～2歳児は気持ちのむらや体力的な要因が音楽的表現力に影響する中でも、観察値は回を重ねるごとに、上向傾向にある被験児が多い。0～2歳児の時期は、Ⅱ-2で述べたように、身体的発達が著しい。その身体的発達による行動の範囲が広がることにより、音への反応が大きくなるので、音楽的表現力に対して、身体的発達の影響が大きいと思われる。

そして、3～5歳児も、観察値が観察を重ねるごとに、27人の被験児のうち20人が上向している。0～2歳児同様に身体的発達、音楽的発達に伴い、音楽的表現力にも影響を与えたものと考えられる。それぞれの子どもの発達にも差があるが、さまざまな身体的発達や音楽的発達に伴い、リズム感や拍子感といった音楽的表現力の成長も現れるようになったと思われる。

また3～5歳児の中には、リトミック活動の経験が4年目から6年目の子どもいる。そうした子どもはリトミック活動の体験を積み重ねる中で、自然にリズム感、拍子感を体得していることが予測される。これは3～5歳児の4月の観察値の値が、表現の消極的な子どもでもあまり極端に低くなく記録されている。(消極的な被験児の平均観察値＝リズム

感 2.4 拍子感 2.0 最低観察値 = リズム感 2.1 拍子感 2.0) そのことから、3 歳児の 4 月の観察値は、0～2 歳年代のリトミック活動の中で、子どもはリズム感・拍子感を体得していることを表していると考えられる。したがって 3～5 歳児は、4 月ですでに子どもの観察値が高いため、10 月までの観察期間においての成長が著しい被験児は少なく、少しの成長や観察値があまり変わらない被験児が多くなっている。4 月の観察値が高いことと、それぞれの年代のリトミック活動が、10 月に向け少しずつ難易度を上げているため、成長度合いが少ない被験児が多い要因にもなっていると思われる。

3 歳児の 4 月の観察値から 0～2 歳児年代のリトミック活動の中で、子どもはリズム感・拍子感を体得していることを表しているという事から、0～2 歳児のリトミック経験により 3 歳児以降の音楽的表現力に影響があることが分かった。身体的発達・音楽的発達も著しい時期ではあるが、全くリトミック活動を経験したことのない子どもは、音楽的発達が遅い子どもになると、筆者の指導経験の中で 3 歳児が初めてリトミックを体験した際、音楽に対する反応や即時反応、リズム感そして拍子感はかなり差が認められた。

## V. 総合的考察—保育者の音楽的表現力の変化と子どもの音楽的表現力の関連

### V-1 分析方法

V では、調査①の 0～2 歳児担当の保育者と、調査②の 0～2 歳の被験児、調査①の 3～5 歳児担当の保育者と調査② 3～5 歳の被験児との 2 つに分けて保育者の音楽的表現力の変化が子どもの音楽的表現力にどのような影響を及ぼすのか分析し、考察する。

具体的には、調査①の保育者をまず 0～2 歳児担当と 3～5 歳児担当の 2 グループに分ける。さらにそれぞれのグループの中で、図 1. 2. 3 研修の自己評価値の上向した保育者と、あまり変化がないまたは下降気味の保育者に 2 分した。3～5 歳児担当の保育者は自己評価値の変化だけでは分けにくい状況だったため、研修後のアンケートの気づきも加味して分けた。

それぞれ分かれた保育者のグループで、観察した被験児の観察値の成長と保育者の自己評価値の T 検定分析を行った。

### V-2 分析結果

表 6 は、被験児観察値の成長と保育者の 2 グループの T 検定を分析したものである。0～2 歳児においては、研修時の自己評価値の上向した変化ありの保育者が観察した被験児は、自己評価値の現状維持または下降気味だった変化なしの保育者が観察した被験児より成長が著しかった ( $t$  値 = -2.404  $p < .05$ )。

0～2 歳児の分析と同様、3～5 歳児の被験児の観察値の成長と 3～5 歳児担当保育者の 2 グループ (上向・変化なし・下降) を分析すると、リズム感では研修時の自己評価値の上向した保育者が観察した被験児は、自己評価値の変化なしまたは下降した保育者が観察した被験児より成長が著しかった ( $t$  値 = 3.418,  $p < .01$ )。しかし拍子感では上向した保育者と、変化なし・下降した保育者が観察した被験児の観察値の差は見られなかった ( $t$  値 = 1.555,  $n.s.$ )。



表6 調査①と調査②の分析

被験児	保育者	N	10月の観察値の平均 －4月の観察値の平均 の差の平均値	標準偏差	t 値	有意確率
0～2歳児	上向	17	1.65	5.999	-2.404	.023
	変化なし・下降	15	6.20	4.693		
3～5歳児 リズム感	上向	13	5.85	3.555	3.418	.002
	変化なし・下降	14	-.29	5.608		
3～5歳児 拍子感	上向	13	2.69	3.066	1.555	.133
	変化なし・下降	14	1.00	2.542		

### V-3 考察

分析結果より保育者の表現が豊かになると、子どもの音楽的表現力に影響を与え、音楽的表現力の成長が高まると考えられる。Ⅱ. で述べた子どもの身体的発達、音楽的発達・表現の特徴の一般的な発達もあるが、保育者の姿・行動は音楽的表現力の発達に影響を与えることが、調査①及び調査②から明確になった。

特に0～2歳児においては模倣しながらいろいろなことを獲得する時期なので、保育園などに通園している子どもにとって、保育者の姿・行動は影響を与える要因の一つである。この時期に保育者が表現しようとする姿勢がないと、子どもはその環境に慣れ、保育者の表現力を低いまま感じとり、模倣していることが0～2歳児の研究において顕著に表れた。

3～5歳児においては0～2歳児と同様の調査①と調査②の比較によって、リズム感では、保育者の音楽的表現力と子どもの音楽的表現力の関係は比例して上向した。3～5歳児の身体的発達、音楽的発達・表現の特徴としては、特にリズム感に対して、感じとり、理解し、表現できるようになる年代である。また各発達だけではなく分析結果のように、保育者の音楽的表現力の影響によって、子どもの音楽的表現力に差が現れている。

本研究の調査①において、保育者がリトミックの研修を受けることによって、リトミックを理解し、それぞれの活動のねらいを理解し、自らも楽しく活動ができるようになってきた。その研修のリトミックの理解度や保育者自身が活動を楽しむ気持ちの差は、通常の保育においても、リトミック活動時においても、子どもと接する時にも、子どもに伝わっていくものである。したがってリズム感においては、保育者の自己評価値と被験児の観察値が比例して上向したとみられる。

しかし拍子感においては、分析に有意性は見られなかった。有意性は見られないが、変化なしの保育者のグループの拍子感の自己評価値は、全般的に高かった。保育者の自己評価値が高いのに、比例しなかった理由としては、1つは、3～5歳児のリトミック活動において、3歳児は2拍子、3拍子を中心に活動をし、4歳児で4拍子の導入から実践し、5歳児で2拍子、3拍子、4拍子の活動を楽しんでいることから、変化ありの保育者と変

化なしの保育者による被験児の観察値の分析で差が見られなかったと思われる。もちろん保育者の自分自身の理解だけでなく、保育時に子どもへの拍子感に対する指導の仕方の変化が、被験児の観察値にも影響があったと思われる。また、被験児の数の認知力の差によっても、多少ながら拍子感の向上への影響はあると思われる。

Ⅱの先行研究でも述べたが、保育者も子どもと共に感動する心を持ち、見聞きしたこと、ふれたものなどが、感じたままに表現できることが必要である（柏瀬 1999）<sup>21)</sup> といえる。そして保育者の音楽を感じる心、子どもと一緒に楽しむ気持ちが子どもに影響を与えていることが、本研究の結果でも確認された。また保育者がリトミックを理解し、保育にどのように取り入れ、子どもに拍子感を感じさせるかは、保育者の音楽的技術にも関わってくる。調査①のアンケートの中からも保育者自身、子どもに伝え方を工夫することが必要と感じているように、ピアノの奏法だけでなく、いろいろな手法で拍子を感じることができるので、保育者が応用しながら子どもと拍子を感じるようにする態度によっても、変化はあると思われる。

以上、保育者の音楽的表現力の変容が子どもの音楽的表現力に関連があるかどうかは、Ⅲ・Ⅳの調査の結果を比較・分析することにより、関連することが明らかになった。

## Ⅵ まとめ

表現には幅広い領域がある。Ⅰ－Ⅰでも述べたように、音楽に関しては、保育者にとって得意・不得意がある。また音楽が好きであっても、音楽的技術に関しては、保育者の一人一人育ってきた環境などによって、かなり差があるのが現実である。表現（音楽）を得意とする保育者はリトミックの研修を受けても、苦もなくさまざまな活動をこなしていくが、表現（音楽）の不得意な保育者は、まず初めに心の壁があり、なかなかリトミックを楽しむ気持ちになるまでに時間がかかった。

本研究のⅢの調査①では毎月継続し、同じ保育園の保育者という同じメンバーで研修を重ねて行ったこと、そして毎回の研修の内容の中には前回の復習を含めながら、内容を深めて行ったことが、表現（音楽）の不得意な保育者にとって、毎回の研修内容が良くわかったと、アンケートに記述があった。

大人はコミュニケーションが取れていない人の前では、なかなか自分らしい表現をすることに抵抗のある人が多い。そのような現状の中で、同じ保育園の保育者だけで研修を重ねることは、とても有意義であった。またお互いの成長を褒め合う場面もあり、表現（音楽）の不得意な保育者も少しずつ自信を付けていったようである。

子どもも、保育者と同じように、表現をする環境に左右される。保育者との関係だけでなく、周りの子どもとの関係も関連する。そのような環境も、観察記録の記述にある気分のむらの一因と考えることもできる。

表現（音楽）の不得意な保育者にとって、子どもの前で音楽の活動をするということにも、心の壁があり、どのように指導すればいいかについて、いつも悩んでいる。しかし研修の成果で、筆者と一緒に担当する学年のリトミック活動の際、表情が変わり、動きも大きくなり、楽しんでいる様子が見られるようになった。

このことについては、筆者と一緒に指導しているリトミック講師が気づき、本研究を始めてから、筆者に活動後に感想をよく述べていた。そのリトミック講師には、研修内容や筆者が保育者に伝えていることは何も話をしていないので、本研究の内容を理解していない第三者にも保育者の表現の変容がわかったことになる。またそれに伴い、子どもの表現活動が変わってきたことにも、リトミック講師は感じていた。

本研究によって、保育者のリトミックの理解や音楽的表現力が高まっただけでなく、表現の中に含まれる表情も豊かになってきたことがわかる。また保育者の表情が豊かになってきたことによって、子どもの音楽的表現力にも影響があったと言える。

保育者の表現力が変容することにより、子どもの音楽的表現力が高まることが、良くわかった。保育者の表現力が変容するためには、保育者自身が楽しく表現できるような環境や研修などにより、一人一人表現活動を楽しむことや自信をもてるようにすることが必要である。本研究では、保育者だけでリトミック活動を行ったのが、適切であった。体を動かして表現することによって、気持ちも広げることができ、音楽的表現力も身につけていった。

音楽的表現力の変化とともに、保育時において音楽的活動を積極的に取り組むようになり、I-1で述べたCDやDVDなどの音源だけでなく、保育者自ら演奏し、子どもと一緒に音楽的活動を楽しむようになってきた。

本研究の調査の結果と調査の影響により、保育時間における保育者の保育に対する姿勢が向上したことから、保育者の音楽的表現力が高まり、子どもの音楽的表現力に影響を及ぼし、子どもの音楽的表現力も高まることがわかった。

調査②の考察でも述べたが、今回の研究では、被験児の観察記録を取ることにについては一人の保育者が一人の被験児を観察したが、今後は一人の被験児に対し、複数の保育者・観察者で観察記録を取ることで、より客観的な考察ができると思われる。

今回は約1年を通して子どもの音楽的表現力の成長に関して明らかにしてきたが、これを機会にさらに長期の調査をする必要がある。

また直接的な被験児の観察だけでなく、第三者による保育者の表現力や子どもへの関わり方の観察、そして子どもの音楽的表現力の変化について観察をし、詳しく考察することによって、リトミック活動による保育者の表現力の変容が及ぼす子どもの音楽的表現力への影響をより深く研究することが残された課題である。

## 註・参考文献・引用文献

- 1) エリザベス・バンディレスパー, 石丸由里訳『ダルクローズのリトミック』, ドレミ出版, (2002)
- 2) フランク・マルタン, チボル・デヌス, アルフレット・ベルヒトルド, アンリ・ガニユバン, ベルナール・レイシェル, クレル＝リズ・デュトワ＝カルリエ, エドモン・スタドレ, 板野 平訳『作曲家・リトミック創設者エミール・ジャック＝ダルクローズ』, 全音楽譜出版社, (1977)
- 3) エミール・ジャック＝ダルクローズ, 板野 平監修, 山本昌男訳, 『リズムと音楽と教育』, 全音楽譜出版社, (2003)
- 4) ダルクローズは、体の動きの経験には筋肉運動が必要といい、「第6番目の感覚」の筋肉運動の感覚は、リズムを生み出すものであるとのべる。その筋肉運動を介してリズムを生み出すので、分析はされていないが、「筋肉のリズム感」と名づけた。

- 5) リトミックは体の動きを通して、リズムを表現する。その際、時間の増減を動きの中で空間の増減として表現し、それがリトミックで形成されるものの核心と伝えている。
- 6) エミール・ジャック＝ダルクローズ, 前記載, pp.77
- 7) 石井玲子『子どもの音楽的表現』, 保育出版社, (2009)
- 8) ドロシー・T・マクドナルド&ジェーン・M・サイモンズ、神原雅之・難波正明・里村生英・渡邊 均・吉永早苗共訳『音楽的成長と発達』, 溪水社, (1999)
- 9) 梅本堯夫『子どもと音楽』, 東京大学出版会, (1999)
- 10) D.J. ハーグリーブ, 小林芳郎訳『音楽の発達心理学』, 田検出版, (1993)
- 11) 石井玲子, 前記載
- 12) 梅本堯夫 前記載
- 13) 小池美知子「保育者の音楽的感受性が幼児の音楽表現に及ぼす影響」, 『保育学研究 第47号第2号』, 日本保育学会 (2009), pp.61-69
- 14) 伊藤仁美「保育者に必要とされる音楽的表現の育成に関する一考察」『こども教育宝仙大学紀要 第1号』, こども教育宝仙大学, (2010), pp. 9-15
- 15) 伊藤仁美「保育者に必要とされる音楽的表現の育成に関する一考察 (2)」『こども教育宝仙大学紀要第2号』, こども教育宝仙大学, (2011), pp.11-25
- 16) 伊藤仁美 前記載
- 17) 竹内敏晴「キレるからだの遠近法」, 『児童心理 54』, 金子書房 (2000) pp. 145-154.
- 18) 永井夕起子 「幼児の表現活動に関する事例報告」, 『奈良女子大学スポーツ科学研究 Vol.13』, 奈良女子大学, (2011), pp.54-62
- 19) 3歳ぐらいになると、2-2で音楽的発達でも述べたがリズムの同期ができるようになる。そこから、リズムに対しての発達が著しい。また、ダルクローズもリズムは動きであると述べているので、音楽的表現の動きの中で、リズムを理解しているかどうかを観察の観点とした。
- 20) 19) のリズム感が発達するにつれ、音楽を表現していくためには、拍子という拍のまとまりが必要になってくる。拍子を音楽のまとまりを理解し、表現できるように3歳児以降、数の認知と共に発達していく。よって拍子感を、3歳児から5歳までの観察の観点とした。
- 21) 柏瀬愛子「リトミック指導を通してみた音楽的唱能力の追跡調査 (その2)」, 『名古屋女子大学紀要 45号』, 名古屋女子大学, (1999), pp.145-158







# The Impact on Transformation of the Childcare Worker's Expressive Power over the Musical Expression of Children :Consideration through Eurhythmics

Yoshie NAKANE

*HANAZONO University*

In recent years, I often get questions by the childcare worker about the guidance on children who have difficulties in expressing themselves.

I therefore closely paid attention to the involvement of the childcare workers to the children during the Rhythmic guidance Class, then I noticed that the musical expressiveness of childcare workers vary individually.

Considering the current environment surrounding children, parents are too busy to set aside enough time to sing with children at home, and the busy situation is the same at the nursery field.

It seems that teachers have less room to carry out the musical activities and have fun with children.

In such an environment, we assume that the amount of the musical expressiveness of childcare workers influence the improvement of children's musical expressiveness.

Therefore, in this study, I will conduct a research focusing on

Firstly, the improvement of their musical expressiveness and understanding of Rhythmic by giving trainings to the caregivers,

Secondly, the musical expressiveness of children by observation records of musical expression from the caregivers to their children.

With these observations, we can say that the musical expressiveness of children can be influenced in better way when the childcare workers have fun to express themselves, gain more musical expression, and try to relate with their children with wider vision on expressing.